

モラロジー・カウンセリングの確立をめざした

御法川誠次郎教授

岩佐 信道

個人的な思い出

御法川誠次郎教授が、モラロジー研究所研究部の、教育研究室の一員となったのは、昭和四十九年であった。当時、若手の研究員の中でも車の運転がずば抜けていた彼は、大澤部長からも信頼されていた。海外から研究部へ来られたお客の送迎のため、彼の運転で羽田空港まで往復したものである。交通量の少ない道を調べてよく知っていた。そのキビキビとしたエネルギーにあふれる行動はとても気持ちのよいものであった。また研究室でのお茶の時間には、彼の入れてくれたコーヒーを味わいながら、おしゃべりが長引くこともよくあった。彼はコーヒーに詳しく、その味も格別であった。しかも、その水は、そこらの水道水ではなく、彼が毎日ポリ容器に入れて自宅から持参していた特別の水（イオン水？）であった。このことが示すように、彼は若いころから、人一倍健康に配慮していたように思う。

そのような彼に私が最もお世話になったのは、私がアメリカに留学していた時のことである。道徳判断について日米の比較を手がけようと考えていた私は、その手始めに、仮想の道徳問題に対して、日本の人々が

どのような反応を示すかを調べたいと思っていた。しかも、モラロジーを研究している人々の考え方が、一般の日本人と異なるかどうかということも興味ある問題であった。私は、アメリカから御法川研究員に電話をかけて、この面倒なデータ集めをお願いしたのである。彼は、私の頼みを快く引き受けてくれ、二、三週間後には、私の示した要領、手順に従って行われた面接調査の記録が、テープで送られてきたのである。その中には、今はお亡くなりになった大塚真三先生や山本恒次先生の面接調査の結果も入っていた。私は、これらのテープも参考にしながら、留学最初の年の課題をまとめることができた。

御法川研究員の経歴は、研究部一筋というわけではなく、ある時期、モラロジー研究所の他の部署も経験している。ちょうど、昭和六十二年、モラロジー研究所で道徳教育国際会議が開催された時には、彼は、モラロジー研究所の御殿場社会教育センターで社会教育に携わっていた。柏での国際会議終了後、海外からの参加者を御殿場社会教育センターに案内したことがあった。彼は、センターの講堂で行われた外国人参加者との対話集会で、司会を助けて、外国人の質問をときばきと処理し、道徳に重点を置いたモラロジーの社会教育の実情の説明に重要な役割を果たしていた。また、この道徳教育国際会議をモラロジー研究所で開催するきっかけとなったのが、その二年前、廣池学園創立五十年記念の行事に招いたハーバード大学のコールバーク教授とヒギンズ博士の来訪であった。この時にも、廣池学園の学校教育のみならず、モラロジー研究所の社会教育活動の実情を知ってもらうためにお二人を御殿場センターに案内することになり、御法川君は、車で富士山とその周辺を案内することを自ら買って出てくれたのであった。富士山は五合目まで行き、白糸の滝なども案内してもらった。

この時の詳しいルーツは覚えていないが、特に印象深いのは、思いがけなく目の当たりにした赤富士であ

る。車は、徐々に低くなっていく富士山の西側のすそ野を夕日に向かって走っていた。御法川君は、前方の夕日が車の後方の富士山全体を赤く染めているのに気づいたのである。彼は、車を止め、私たちも降りて、赤富士を背に写真をとったのである。私も「これが赤富士か」と大きな感動を覚えるとともに、コールバーク先生にも、葛飾北斎の浮世絵、富嶽三十六景・赤富士のことを話した。先生も、大変感激しておられた。この時の感激は、当時御殿場センター長であった駒井さんが、御法川君から話を聞き、また赤富士を背にしたお二人の写真を見て、それ以後も、機会あるごとに言及されていたことを思い出す。

モラロジー・カウンセリングの研究

その後、御法川研究員は出版部にも席をおき、課長も務めている。こうした、いろいろな経験は、彼のカウンセリング研究に大きな意味をもっていたと思う。ふたたび古巣の研究センターにもどってきた時には、その活躍が大きく期待された。彼は、センターの研究会では、カウンセリングのさまざまな理論や立場についてよく紹介していた。特に、そうした理論の具体的な実践やその効果についての紹介も、次第に説得力をまましていったように思う。昨年には、ドイツでのファミリー・コンステレーションという立場の研究会にも参加して、研修を重ねている。学部でドイツ語を専攻した彼としては、ドイツでの研修は、水を得た魚のようなものではなかったかと思われる。彼が、この研修から大きな成果をえたことがその後の、研究会での報告からも伺えた。また、最近では、千葉県のスクール・カウンセラーとして公立学校にも出かけていた。そうした経験の積み重ねを通して、学校教育のサイドからの児童生徒の心の在り方や、指導法についてデータを集めていた。これも遠からず、形になることが期待されていたのである。

彼の研究センターにおける研究の中心的テーマは、モラロジー・カウンセリングの確立であったと思う。このテーマに直接かわかる論文が、昨年(2008年)の二月発行の『モラロジー研究』に掲載された。これからこのテーマで一層の発展を期待できると思っていた矢先のことであった。彼を追悼する文章の中でこの論文についてふれなければならないことは痛恨の極みである。

彼は、この論文の中で、カウンセリングとは何かを明らかにしている。さまざまな学者の定義に言及しながらも、結局「面接やグループ・ワークなどによる言語的または非言語的コミュニケーションを通して心理的相互作用によってクライアントが自身の行動や考え方を変容するための援助を行うものであり、クライアントの人格的統合の水準を高めるための心理的方法である」と自分の立場を明確にしている。私には、バランスのとれた適切な定義のように思われる。

カウンセリングそのものをこのようにとらえた上で、モラロジー・カウンセリングについて論を展開していくのであるが、まず、モラロジー・カウンセリングの人間観を(一)意味の探求、から始め、続いて、(二)日々の生活の実現、(三)自己反省の意味、(四)感謝生活の実現、(五)三方善しの実現——つながりの回復と自己の実現、と五つの項目で論じている。私の観点からすれば、ここに「相互依存のネットワークの中で生きる人間」といった側面を盛り込んでみるのも面白いのではないかとも思うのであるが、彼なりのモラロジーの人間観として興味深いものである。

特に最後の「三方善しの実現——つながりの回復と自己の実現」については、次のような点をどのようによく考えるのであろうか。「つながりの回復」ということがいわれているのであるが、「回復」がいわれるからには、現状では「つながり」に「ほころび」が見られるということであろう。目指すべき「つながりの回復」

そして「三方善しの実現」は、人間の本性において、どのように位置づけられるのであろうか。後進の研究者によって、今後一層の展開が期待されるところである。

論文では、「モラロジー・カウンセリングの人間観」に続いて、「モラロジー・カウンセリングの病理観」「モラロジー・カウンセリングの具体的方法」「モラロジー・カウンセリングの展開の流れ」が展開されている。これらの詳しい内容については、彼が重要な役割を果たしたモラロジー・カウンセリング・セミナーの講師陣の皆さんや受講者たちのそれぞれの実践の中で確認され、生かされていくものと確信している。

それにしても、今年の春には、主任研究員から教授へと昇進し、一層の活躍を期待していた矢先に、体調の不良を耳にすることになった。人の命は、人間の常識を寄せ付けない厳しさがあることを痛感せざるを得ない。今は、御法川誠次郎教授の冥福を祈るばかりである。そして、彼によって緒についたモラロジー・カウンセリングの体系化が、一層の進展をみることを祈らずにはいられない。